

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	伊藤 (有元) 志保
論文題目	“The nostalgia for impossible things”:William Sharp’s Pursuit of an Alternative in His Life and in His Works (「存在しえないものへの思慕」－ウィリアム・シャープの実生活と創作活動を通じた理想の追求)		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、スコットランド生まれの作家ウィリアム・シャープ (1855-1905) に関する、伝記的アプローチと作品分析による研究である。シャープは、フィオナ・マクラウドという女性の異名を名乗ってスコットランドにおける19世紀末のケルト文芸復興を主導した人物として知られている。シャープに関する先行研究では、もっぱら彼が異性を装った行為の特異性に焦点が当てられてきた。しかし本論文は、シャープの作家活動と実生活において異名を名乗った背景と意義の考察と、作品の解明とを有機的に結びつけることを目指している。</p> <p>序章では、論文全体の見通しが語られるとともに、シャープの生い立ちと社会的背景が概観される。シャープが人生の早い段階から自覚していたアイデンティティの不安定さの要因として、彼が、強力な社会・文化的影響力を持つイングランドと、固有のゲール文化を維持するスコットランド・ハイランド地方の間に位置するスコットランド・ローランド地方出身であり、イングランド、ハイランドの双方から文化的影響を受けたこと、および父親の強権への反発が挙げられる。また、自己の二重性を強く意識する彼のメンタリティは、資本主義社会の発展やジェンダー観の変容、宗教的権威の衰退など、19世紀末イギリスの時代性を反映するものであるとの指摘がなされる。</p> <p>第一章では、創作者を目指すシャープが批評家として身を立てるに至った経緯が、商業的文学界での精神性保持の苦闘として概観される。急速に商業化する文学界においてシャープが自身を積極的に売り込んで一定の地歩を築きつつも、その一方でロンドンを中心とする商業社会と、そこで期待される男性像に対する違和感を強めていった過程が、本人や周囲の人物の回想録などをもとに再構成される。シャープは社会のマイノリティに位置づけられる人々に親近感を抱き、作品上で彼らやその共同体を深い精神性や自然との親和性を帯びるものとして表象した。ここではその初期の例として、ユダヤ性や女性性に焦点が当てられる小説『明日の子供たち』 (1889) が取り上げられる。次に、女性の地位向上の問題にも関心を示していたシャープが女性作家B. W. ハワードと共同執筆した書簡体小説『男とその妻』 (1892) が分析の対象となる。この作品は当時流行していた「新しい女」小説の流れを汲むが、二人の作家が道徳的批判を懸念してか、結婚制度に関する鋭い問題提起はなされなかった、という限界も本論文は指摘している。</p> <p>第二章では、シャープが近代社会の対立項としてケルト性に着目し、それを題材とした作品を執筆するだけでなく、ケルト的性質を体現する存在として女性作家フィオナ・マクラウドというペルソナを構築した過程が検証される。まず、マクラウド名義</p>			

での第一作『楽園』（1894）で描かれた審美的なケルト世界と、シャープが理想的な自己を投影したマクラウドというペルソナの間の類似性が指摘される。すなわち、体制への反発から既存の自己と社会に代わるものを模索したシャープにとって、マクラウドを名乗る行為は彼の創作における姿勢と同根のものであった、とする。その一方で、マクラウドという名を単なる筆名として使用するだけでなく、実生活において「ケルト作家」にふさわしいロマンティックな他者としてのハイランド女性を積極的に演じたシャープの行為には、変身願望や自己顕示の欲求、さらに当時のイングランド人のケルトに対する関心の高まりを意識した彼の商業的戦略も見て取れる、との指摘もなされる。

第三章では、シャープの女性的なるものとの親近性が、従来言われてきたような生得的なものというより、むしろ意識的に構築したものであったこと、すなわち、シャープにとって女性は、彼が社会との精神的距離を表現するために共感を寄せたケルトの民など他のマイノリティ同様に、恣意的な表象の対象であったことを論じている。マクラウド名義の小説『山の恋人たち』（1895）では、女性を観察、研究の対象とするシャープの視線を反映するかのよう、男性登場人物たちが、女性登場人物たちに憧れと不安が交錯した眼差しを向ける。また、女性に対して男性が共有する不安を描いたシャープ名義の中編「ジプシーのキリスト」（1895）において、女性の台頭を強迫的に恐れるロマ（ジプシー）共同体の男性たちには、女性作家の台頭が目覚ましい文学界で商業的成功を得るのに苦労したシャープ自身の感情が反映されている可能性が示唆される。

第四章は、シャープの二重生活が次第に困難を来した経緯を辿り、そのことと晩年における彼の創作活動の停滞との関連を論じている。シャープは自己の内奥をマクラウドに投影したが、マクラウド名義の作品が世に受け入れられ、マクラウドの存在が社会で現実味を帯びるにつれて、「彼女」とシャープの理想化された自己像に乖離が生じていったことを確認し、彼の創造力の衰退にはマクラウドを名乗り続ける意欲の減退が関わっていることを論証している。そしてマクラウド名義の小説『緑の火』（1896）を取り上げ、後に大きく修正されたこの作品には、マクラウドの正体の露見を恐れてシャープ、マクラウド両名義で意識的に書き分けを行わざるを得なかったシャープの精神的負担が顕著であると論じている。

終章では、マクラウドの創造が、シャープの現実に対する不満や不安からそれに代わるものを表現しようとした苦闘の過程であったことが確認される。物質偏重主義社会の対立項としてユダヤ、ロマの民にも共感を示したシャープにとって、女性性とケルト性への傾倒は芸術の追求の一過程であった。マクラウドを名乗る行為とその異名での創作は晩年のシャープにとって重圧ともなったが、それらの活動によって彼は自らの追求するものに最も近づいたのではないかと結論付けている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、本名の男性作家として、および筆名の女性作家として、秘められた二重の創作活動を続けたスコットランド生まれの作家ウィリアム・シャープ (1855-1905) に関する、伝記的アプローチと作品分析による研究である。女性作家マクラウドの方は19世紀末スコットランドにおけるケルト文芸復興を主導した人物として知られ、現在では主にスピリチュアル系、ファンタジー系の読者層にのみ知られている。男性作家シャープに関しては、彼が異性を装った行為の特異性のみが記憶され、その作品研究はほとんど行われていないのが現状である。しかし本論文は、シャープが作家活動と実生活において異名を名乗った背景や意義の考察と、本名、筆名両方の作品の解明とを有機的に結びつけることを目指している。

論文の構成は、目次、序章、第一章「自己の二重性への執着と変身願望」、第二章「第二のペルソナの構築」、第三章「他者としての女性への視線」、第四章「統合と分離の間で揺れて」、終章、注、文献一覧からなっている。アイデンティティの不安から女性の異名でも創作をすることを選んだシャープが、作風の書き分けに腐心し、商業的にも芸術的にもある程度の成功を収めるものの、次第にその重圧に精神を病んでいく過程が時系列に沿って丹念にたどられている。

本論文は、以下の二点において学術的価値の高いものとみなしうる。

第一に、本研究の独自性が挙げられる。シャープの没後、生前に秘されていた二重の創作生活が世間に明らかになると、その欺瞞への非難から彼(女)の作品の評価が急激に下がり、1970年に最初の研究書が出版されたのちも、十分な研究がなされてこなかった。しかし、しばしば指摘されるように19世紀末というヴィクトリア朝的価値観の瓦解の時代にあって、大英帝國的男性性への信仰が揺らいでいたこと、また作品の芸術的価値を考え併せると、シャープは不当に無視されてきたと言わねばならないだろう。本論文は、従来注目されなかったシャープという作家の全生涯と主要作品に光を当て、再評価を促すという役割を果たしている。英語圏でのまとまったシャープ研究はこれまでわずか2点にとどまる。本論文はそれらに続き、初めてシャープの全体像をとらえた研究であり、従来の英国ヴィクトリア朝文学研究にも新しい一石を投ずるものとして評価しうる。

第二に、本論文が男性性・女性性を扱いながら、フェミニズム批評の構図に依存することなく、作品と書簡などの文脈に丹念に沿いながら、シャープの創作の秘密を解明することに努めている点である。女性作家が男性の筆名を用いることによって、男性中心主義的な文壇に切り込んだ例はしばしばフェミニズム批評の対象としてとりあげられるが、男性による女性名の使用がその対象となることは稀である。本論文は、女性名での処女作『楽園』の成立過程を探り、シャープによる女性のペルソナの創出を、理想の自己を虚構のケルト女性に投影したものとしながらも、同時代のロマンティックなケルト観へのおもねりや商業的成功への意欲といった世俗的な動機をも探り出している。また、『明日の子供たち』、「ジプシーのキリスト」、『山の恋人たち』のテキストと、執筆時の書簡とを往還することによって、シャープの女性に対する親

和性と強迫的恐怖の共存を指摘し、この作家の複雑な心理に切り込んでいる。これと同時に、女性のみならずユダヤ、ロマ（ジプシー）、ケルトといったマイノリティ・グループもまたシャープにとっては高度な精神性、自然との一体感といった理想を投影する対象であった点を指摘している。さらに、シャープ本人とは分離した人格であるはずのマクラウドの名で書いた『緑の火』に、二つの人格の接近を読み取り、シャープ後期の苦悩までを忍耐強く追っている。このように本論文は特定の思考の枠組みに囚われず、シャープの創作活動の全体像を把握している点でも評価しうる。

とはいえ、本論文には今後深化されるべき課題も認められる。たとえば、19世紀英文学の本流にも目を配り、本流との比較を行うことによってもっと厚みのある立論になったであろうと思われる。また、作品中に描かれる怪奇な現象に着目して、ゴシック小説との関連に触れることもできよう。また、この論文ではジェンダーや自己と分身というテーマが伝記的手法によって論じられているが、テーマの性質上、精神分析批評をはじめ多面的なアプローチも有効であろう。しかしこれらの点は、むしろ今後のシャープ研究の豊かな可能性を示唆するものであるとすべきである。

なお、本論文で用いられた英語は簡潔で明快であるが、論理の展開に合わせて洗練された表現を使いこなしているとは言えない。しかしながら、未開拓に等しいシャープ研究に資することを考えると国際言語である英語で論じたことには意義があり、日本からの貢献として評価が期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと判断される。また、平成23年2月16日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：           年           月           日以降